

■成寿アーカイブ 第三十二卷（二〇〇一年夏季号）より

黒田武志善光寺前住職が発願し発刊された『成寿』も四十五巻を数えます。檀信徒の皆さまに親しみを込め、解り易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し成寿に掲載されたお話を再録させて頂きます。二十一世紀を迎え善光寺の理念を今一度示され原点回帰。善光寺を創られたお心を吐露されております。エネルギーシユな先代さまのお声が甦るようです。

二十一世紀の使命

善光寺住職 黒田武志

私はいつも考える。出来ることはなにか。為すべきことは何か。私に残された時間はどれだけか。この四十年間考え続けてきた。これはウズキであり、いつこうに止まらない。ありがた

いことです。いつでもこの気概を持てる自分に喜びを感じます。お釈迦様の少し先輩にあたる孔子さまは、教えの第一章に「学びて時に之を習う。亦悦ばしからずや」すなわち私たちはま



ず人の道、仏の道、神の道を学ぶことにある。その学んだことは、心にとどめおいて必ずなんどでも自ら練習し、実行してみることだ。これが習慣ともなれば、自分も高まり生きていることが実に楽しく、うれしくなる。これが「学習」という言葉の生まれでた所以だという。まことにその通りだと思えます。

人間、学び実行していると必ず周囲から、遠くから、実行しているその人のところに同志やいろいろな人たちが一緒に研究しよう、修行しよう、仕事しようという「人が集まって来る」。これこそ「徳は弧ならず 必ず隣有り」ということだと教える。私はこの教えに啓発され、仏道を深く学び何かを実行してゆくというそんな気が概で今日まで歩いてきたように思います。二千五百年前も、二十一世紀の今もこの教え、思想はまったく変わらない。なぜ？これは「真理」だからです。

特に私は道元禅師の修証義第四章「発願利生」の魅力にとりつかれ、限りなくその教えに近づきたいと思いつけ続けている。この発願利生とは仏道を求め菩提心を発すということ、何かという「利他」の精神と行動を発することなんだと説かれている。これこそ、君子も聖人も、仏も、神も説くところは共通している。従って

この心こそ万人共通であり、個人も、家庭も、企業も、社会も国もこの菩提心を発すなら争いもなく天下治まり豊かに、幸福に発展していくと教えています。

私もこの教えを基本に、三つの志をもっています。一つには祖師を通して釈尊に還る、二つには仏道を通して世界平和の祈願とそれに力を尽くす、三つには利他の思想で発願利生するということなのです。私にはこの三つの智慧を二十一世紀の使命としてさらに具体的にどのように行動で示すかにかかっている訳です。この志は一朝にできたものではありません。翻ってみまするに、幸いにして寺に生を受け、遭い難き仏法に遭い、父白純和尚の大きいなる影響を受け、母の懐に抱かれ、その温もりの中で成長した。食い盛りの七人男兄弟、その五男坊。生存競争の厳しい中、私の青春は苦痛、苦悩に充ち、容赦なく煩惱の中に引き込まれていった。

やがて駒澤大学大学院を卒業、雲水として大本山總持寺に籠もる。そして日々喘ぐ。のち永平寺に雲水の末席を戴き、行往坐臥。人並みの求道の姿勢を見せながら苦悩する。求めても求めても、いつこうに己事究明に至らない。仏道を授けられても、自分を探し出すことは安易ではない。貧困な知恵は揺れ、心身は蝕まれる。ついには「延壽堂(病室)」に入る。この時点で、私はあらゆる機会から遠ざけられ隔絶されてしまった。何とか脱出を試みる。自分にも愛想尽きこれ以上永平寺に籠もる理由を見いだせない。

乞暇する。そして東京を目指す。懐には一銭の金もない。友人に頼んでも汽車賃を満たすには程遠い。これでは一銭の無駄もできない。やむなく福井駅まで歩く七里の道程。着の身着のまま袈裟文庫を振り分け、荷物を背に網代笠、脚絆に草履履き、一目散に山を駆け下りる。善

くも悪しくも逃げ出したことになる。

道すがら経をあげながら托鉢をする。追い込まれ、自ら進んでやった初めての托鉢。夕闇迫るころ漸く駅に着く。ベルが鳴り汽車が滑りこむ。慌てて駆け込む。ホッと一安心。まもなく車内アナウンス。列車は富山經由直江津行きだと言っている。なんとする。逆方向ではないか。からだ中の力が抜け、座り込んでしまった。私に方向転換の示唆。これはキット仏様のご意思。やがてこれも運命かと諦め観念する。

ここが私の運命のわかれ道。禍転じて福。これが運命を大きく変える。思うことあり、日本一周行脚の旅に出る。粗食を食い、水を呑み、風雪を友にしながら歩いて歩いて托鉢行脚。身を以て体験し見聞する。四季を越え、漸くゴール。この過程で改めて自分の無能、無学さ、愚かさ、貧しさを認識する。それでも拙い自分がいとおしかった。今一度仏道に行ずる必要を実

感。

悔い多き日々を省みながら昭和三十八年、再び大本山總持寺の特別僧堂第一期生として基本から学ぶ。私にとつて大事なことは、それまで歩いてきた道のりであり、今おるところである。どうしてもそれを見直す必要がある。過去と今に立つ現在とがわかれば、未来すなわち往く道がわかる。私は「生き方」について少しもわかっていなかった。「手を合わせ」感謝する素直な心をもっていない。本当の仏道に全身全霊を打ち込み、真剣にぶつかっていなかったのだ。ただ知っているつもり、ただわかっているつもりを積み上げてきたにすぎない。だから世間には通じない、いわゆるお山の大将。これが漸く分りかけてきたから出直し、やり直しとなった次第。

山に登り、われに還つて静寂の中に独り坐っている。かすかな葉音さえ心に響いてくる。そ

の音と気配は、ある瞬間から私のいのちの充実の足音となり、生きることの喜びとなる。そして生きることの楽しみさえ覚えてきた。これは私なりのある「開眼」であった。人間だれでも大事なことは、自分を見直し、開き直し、そして思い直してみることだと思う。そして学び直す、何度でもいい。繰り返すことこそ進歩、これが学習。学ぼうちまたウズク。矢も楯もたまらず仏道の原点に心がはやる。そのままインド仏跡を歩きタイに渡る。仏教の原始、上座仏教のワットパクナム寺院に得度出家する。戒律二二七に守られ一年半を過ごす。さらにその足でアメリカ本土に渡り、米人と一緒に坐禅をし、開教師として過ごす。のち帰国。仏道に帰依し伝道者としての役割を深く認識。いつしか世界観なくして仏道は語れないことを識る。はるか遠く飛鳥の時代、日本の仏教は聖徳太子により招来され開花する。釈尊の教えに基づいて、太

子様は日本の憲法を草案される。それを十七か条に示されたことは誰でも承知しています。第二条に論語から「和を以て貴しとなす」、第二条は仏教より「三宝（仏・法・僧）を敬え」と人々に篤い信仰心を求めておられます。それ以来時代の流れに従い、幾多の高僧、名僧が釈尊の蒔かれた八万四千種類の仏の種子を求め、それこそ生命を懸け、心血を注いで仏教の「日本化とその普及」に努めてこられた。そして「仏となり」だれでも「仏となりえる」としてあい教えあり導きながら大いなる仏の心をお示しになった。そして今日に至っている。この尊い布教活動はあたかも壮大な曼荼羅図のようにいつでも私たちのそばにあります。

それぞれ拾いあげられた種子は、それぞれの土地でそれぞれの花を咲かせ、それこそ多種多様にたとえば空海、最澄、日蓮、法然、親鸞、栄西、道元と彼の高僧たち、時代と場所と理念

と思想と学びにより「悟りへの道」の示し方、その花の咲かせ方に変化が生じてきた。それは限りなく枝分かれし分派しながら点から面へ発展普及しひろがってきた。各宗旨・宗派に枝分かれはしても源は同じ釈尊の教え。各宗派の入り口は同じでも出口が少しずつ異なっている。基本的には菩提心の貴さを説いている。したがって仏教の宗旨、宗派にとられ拘ること一切なし。おそれながら私は真の仏教をあらためて原点に探り、私の視点でその真理を求め承知したかったのであります。

インドに起こった仏教がどのようにして伝わり、どのような形でどのような国でどのように開花し、人々の心の救済を為し得ているのか。その為には僧侶として自分がどのような役割を担えばいいのか。漸く私なりに認識しつかむことができたように思う。結果「発願利生」に辿り着いた。

この尊い体験こそ、時空を超え私に重大な使命感を抱かせる。僅かなことで迷い苦しむ人間。そんな人たちを救い、世界平和と人類の幸福に寄与したいと念願。その為にはいったい何を学び、何を実践し、何を残すか。それを具現化するため、いささかでも源泉を得たと得心する。あるいは自分なりに覚醒したといつてもいい。道元禅師の謂う「菩提心を発すというは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願し営むなり」仏の心を発すというは自分がまだ悟りきらなくても、まず他の人々を迷いの境地から、悟りの世界へ渡してやろうと心に誓い、行うことだと示し、迷いと苦に満ちた世に光をあて、救済してゆくというのが釈尊の教え。世界のあらゆる宗教・聖者の説くところすなわちこれが愛であり、慈悲心あり、おもいやり、仁ということなのです。しかしながら現状は、宗教の求める安心・平和・幸福には至っていない。私の

使命もここにある。み仏の教えに国境はない。差別もない。世界中の宗教家たちと方向を共有し、民族・性別・宗教を超えて、すべての人びとが真理に目覚め、安心・平和・幸福を祈りつつ、それを共有することにある。これはとても私一人のできるものではない。「国」や「宗教」や「私」にとらわれず、釈尊の教えを正しく伝え導く力こそ、なくてはならない大事と捉え、私は人材の発掘、育成に心血をそそぐ。

具体的にはその拠点となる新寺を横浜に建立。早や開創三十三周年を迎える。すでに約三千の檀家を持つまでになる。日常の寺院活動と平行して横浜善光寺留学僧育英会を設立。このすべての基金は、多くの檀家の理解と協力の元に運営され、「法輪転ずるところ食輪転ず」の教えに従い、檀信徒の皆様「毎度のおかず一口分だけ減らしてご協力下さい」と一人一仏を願う。これに対し日に月に年に皆様が応分に

ご協力くださり実ありがたいこと。この尊い浄財、一銭たりとも無駄にはできません。この基金により毎年世界中に留学僧を公募し、目的に応じ各国に派遣。すでに派遣先二十ヶ国一〇〇名を送り出している。また海外からの受け入れも進み、留学僧たちは世界に学び、そしてあらゆる国々に貢献する。これが私の具体的な「発願利生」。

留学僧たちもいささか私の願いを叶えつつあることは嬉しい。人間は誰でも心のもち方で変わる。他人の身になって考える、この心は人にも同じ視野が開けてくる。その心は「身を削り人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」そして「宗祖を通して釈尊に還れ」をモットーに、私は地球全体を視野に入れ、国際交流を果たして行きたい。私とて残された時間はまことに微く待つてはくれません。果たしてこれはいつまで続けられるかわからない。

釈尊の説かれた慈悲の精神は、世界平和を樹立するための人間に与えられた英知。世界は今まさにIT革命通信・交通・情報手段の発達著しく急激に世界を狭くしている。もはや世界全体、地球規模でものを考えなければ、経済も社会も政治も宗教も語れない。すべては国際化の時代。しかしながらIT革命というても所詮は通信手段。この普及が不可避なものではありませんが、根本的な人間の生き方や幸福感をもたらすものではありません。結局慈悲の精神によって結ばれる理想の世界こそ真の平和の実現につながってくる。いまこそ国際交流のときであり、その中で果たすべき仏教の役割は、あまりにも大きく急務である。

私は育英会設立十五周年を機に横浜市街地から多摩丘陵にさしかかる一角、六九〇〇平方メートルの宗派不問、国籍民族不問の霊園を実現した。開園と同時に一三〇〇基を販売完了。さ

らに集合慰霊塔建設もすでに完成、墓地のない方には納骨堂にご遺骨やご位牌のお預かりが出来るようになりました。お墓は人々の心の拠り所。永代の住まい。決して霊園事業であってはならないと思っている。

人間、「生老病死」生を受け、死ぬまでこれは自分ではどうにもならない。この避けて通れぬ不測の事態に備えて安心することができる霊園墓地『やすらぎの郷』これこそ、私の信念する仏道の在り方であり、一切を寺が企画し開発から運営管理まですべて僧侶とそれぞれの分野の専門家が関わってゆく。此処に眠る方にもお参りする方にも癒す心充たされるように、永遠の喜びと安らぎを提供してゆく。まさしく「治生産業。固より布施に非ざること無し」この地こそ愛語・利行・同事の実現の場だと思っております。

私はこの永遠なる郷に隣接し、いずれ世界仏

教交流センターを興したいと発願している。先に述べたように、等しく世界観を持つ同志が、文化・宗教・民族を超えて、世界の恒久的不戦平和を願い、その為の国際的交流と活動の方向を共有しながら、その情報発信基地と位置づけ、これが機能する場として提供していきたい。これこそが私の終局の発願であり、利生。具体的に煮詰まっているものではない。また何時どうするかではなく、いつかそうしたいと限りなく信念していさえすれば、やがて御仏の導きがある。そして必ずや実現する。それも遠くはないと思っている。できるも、できないも御仏のからい、すべては天意。できるもよし、できないもよし、私はこの道を往く。それが定めであり、なすべきことと感得する。このことが道元禪師の謂う「発願利生」。要は何をするにも人材。共感共鳴する賢者が求めてやって来ると信じている。いかにも「朋遠方より来たるあり、また

「樂しからずや」であります。これこそ私が後世に残すべき二十一世紀への遺産だと思つてゐる。



